



The Royal Photographic Society

Patron: Her Majesty The Queen. Incorporated by Royal Charter

NEWS LETTER

第 24 号 2012/06/28

発行所 英国王立写真協会・日本支部
〒107-0051
東京都港区元赤坂1-7-10
元赤坂ビル9F
Tel 03-5413-7829
Fax 03-5413-7410
E-mail : yoshi-rpsj@hotmail.co.jp
発行人 林 喜一 編集人 川村賢一

<http://www.rps-japan.org>



初代支部理事長

青木 朗「お別れ会」

2012年4月9日、ホテルオークラ東京 平安の間にて催された青木朗名誉会員のお別れ会に支部会員有志で出席。

青木会員は、支部設立にあたり、多大なご尽力をされ、RPS本部よりメダルを授与されている。近年は、体調が思わしくなく、去る3月6日92歳にて永眠された。

昨年支部写真展のオープニングパーティに、思いがけず数年ぶりに参加され、皆さんと交流されたのが支部での最後の活動となった。

故人は、国際的な特許法律事務所を創設し、国際知的財産保護の分野での多大な貢献により、数々の受賞を得るなどのご活躍の傍ら、写真技術の発展にも情熱を傾け、ごく最近までデジタル写真技術の開発に取り組み、特許も取得している。

青木会員を初代理事長として、RPS本部事務局長を英国から迎え、当時の英国大使ご夫妻ご臨席のもと、英国大使館のVIPレセプションホールにて催された支部設立パーティーは、今でも鮮明に心に刻まれている。

心から青木名誉会員のご冥福をお祈りいたします。



第10回RPS J 写真展開催

来場者700人超で過去最高!

2012年3月9日～15日、昨年に続き東京の銀座ファイブ2階のフレームマン エキジビションサロン銀座にて、支部写真展を開催した。

今年のテーマは、昨年好評であった「Feel British?」(イギリスばいってどんなこと)を引き継ぎ、それぞれが感じた英国らしいイメージを写真で表現した力作約50点を展示。

今年は、10回目となる区切りの写真展だが、天候にも恵まれ、最終的には、過去最高となる700名超の来場者を数えて盛会のうちに終了した。この数字は、フジスクエアのメジャーなギャラリーを除けば、申し分なくAクラスと言える。

写真展オープンの直前に、青木名誉会員の訃報があり、これまでの支部の歴史を改めて振り返り、思いを馳せる写真展となった。

作品のバラエティも様々で、それぞれが「Feel British?」をどう解釈し、どう表現するか、なかなか興味深いものがあり、来年も、引き続きこのテーマを追求する予定となっている。

今回、オープン間際に、林理事長の発案で、ニュースレターのバックナンバーからセレクションパネルを作成した。少々細かい字で読みにくかったと思うが、多くの方が足を止めてくれて、なかなか好評であった。

写真展の担当者は、長年ご苦労いただいた高原会員から、齋田会員に引き継がれたが、ご高齢にもかかわらず、大変お元気で、ほぼ連日会場で来場者の世話をされた。さらに、人の流れが途絶えると、通行人に声をかけては、ギャラリーへ精力的に一本釣りを試みる情熱には、頭が下がった。来場者過去最高のいったんは、齋田会員のこうした努力にも支えられたものだ。



フレームマンエキシビジョンサロン
Gallery II

英国王立写真協会 第10回 日本支部(RPSJ)の写真展
Feel British
「イギリスばいってどんなこと？」

The Royal Photographic Society

2012年3月9日(土)～15日(木) 10:00～19:00(日曜閉館 最終日は17:00まで)




英国王立写真協会
第10回 日本支部(RPSJ)写真展

Feel British
「イギリスばいってどんなこと？」

The Royal Photographic Society

From: Her Majesty The Queen. Incorporated by Royal Charter



期日：2012年3月9日(土)～15日(木)
10:00～19:00(日曜閉館 最終日は17:00まで)
会場：フレームマンエキシビジョンサロン銀座
銀座ファイブ2F



● 第10回RPSJ写真展スナップ

「新聞写真が一番」 2

上田 頌人



新聞写真とは。

新聞は、有事、何かある時は大変楽です。平時、何も無い時が一番大変で白紙では発行できません。東日本大震災の様な（今世紀最大級のビッグニュースかもしれないですが）大事件があれば新聞作り（紙面製作）は楽です。毎日、震災や原発関連記事・写真で埋められるからです。

ただこういう突発的な発生ものは、発生段階での運、不運があります。東北大震災では大津波襲来の瞬間を撮った毎日新聞のスクープ写真は、2011年の日本新聞協会賞を受賞しましたが、これは、地震発生時たまたま同社のヘリコプターが東北取材をしていて、津波が襲来する瞬間を捉えることができたものです。朝日や読売などは東京から発進していますから、津波の瞬間は全く撮れませんでした。

但し、かつて秋山庄太郎さんが「アマチュアほど怖いカメラマンはいない」と言っていたのですが、実に多くの人たちがビデオで真っ黒な津波が押し寄せてくる瞬間を撮っていました。そこから多くの写真が新聞にも掲載されました。

こうした大事件の場合は、続報も勝負になります。業界用語かもしれませんが、「後追いの新聞」と言う言葉もあり、続報も各社の腕の見せ所です。写真で言えば、現場に入り様々な被災者の表情を撮る。例えば、瓦礫の中で少女が蹲くまわって泣いている写真とか、女子高校生がトランペットを吹いているといった感動的写真が何枚も掲載され、ご覧になった方は記憶に残っていると思います。こういう現場を見つけることが写真記者（目撃者がカメラマンだけなら当然記事も書く）の眼であり、醍醐味でもあります。目撃した時は、「やったー！一面だ！」と身震いする事もあります。

（仲秋の名月：有名になった一本松の写真）

仲秋の名月は年中行事ですが、担当カメラマンは大津波で残った一本松を点景に選び、2011年を象徴する名月の写真として作画した。仲秋の名月や月食の時は、毎年、何を点景にして撮るか、どこから撮ったら良いかと、何日も前から色々考え、計算して、いかに印象に残るものを撮ろうかと考えます。

この点は事件でも同じで例えば、ペルー大使館人質事件（1997年）では英語の堪能な共同通信のカメラマンは、「共同のカメラマン」という大きなプラカードを作り、庭に入り込みゲリラと交渉の上、内部潜入に成功、初めて内部の状況を撮りまくって大スクープをものにしました。

イラク戦争ではフセイン大統領の銅像が倒れる瞬間をスクープしたのも共同でした。他メディアは本社の命令で全員バグダッドから撤退したのですが、共同のカメラマンだけは、自己責任で危険な現場に残りました。フォトジャーナリストのお手本でもあります。有事、平時にかかわらず撮影現場における創意、工夫はカメラマンの腕の見せ所でもあります。

新聞写真 100年の歴史と技術革新

新聞写真として、もっとも競争を強いられるのは、他社との競争もありますが何と言っても締め切り時間です。どんなに素晴らしい特種写真を撮っても新聞に掲載できなければ一文の価値もありません。「いかに速く写真を撮って、送って、新聞に掲載するか」というのが、新聞写真100年間の歴史です。

1904（明治37）年に日露戦争があり、その時旅順攻防戦の写真が1ヶ月かけて、当時本社だった大阪の朝日新聞に届き、報道写真として初めて新聞に掲載されました。その後、写真送稿（輸送）は列車、自動車、飛行機などを利用し徐々に速くなり、写真電送機を経てパソコン送信へという長い歴史があります。

1928（昭和3）年、張作霖が列車爆破によって死亡した事件では、撮影されたフィルムは列車と平壤まで来ていた飛行機により大阪へ運ばれ、翌日、号外として掲載されましたが、当時としては画期的な速さでした。

また、輸送のユニークなものとしては伝書鳩の利用がありました。明治26年頃から東京朝日は、伝書鳩による記事通信の研究と訓練を始め、ベスト版のロールフィルムが出現して初めて写真を鳩に運ばせることが可能になりました（1922年）。以後、日本の新聞社はどこも伝書鳩を飼うようになり、1964（昭和39）年の東京五輪頃まで、当時有楽町にあった朝日新聞社屋上の鳩小屋には約300羽の鳩が飼われていました。出張するカメラマンは、鳩を3羽籠に入れて持って行き、撮影後現像したフィルムを切って、1枚づつ鳩の帰巣本能を利用して運びました。ところが、鳩は必ず帰ってくるとは限らなかったため、保険として3羽に持たせたのです。

今の天皇陛下が英国女王の戴冠式（1953年）に参列するため船で行ったのですが、毎日新聞のカメラマンは、鳩を4羽持って乗船し、船上の一夜明けた皇太子を撮り、現像したフィルムのコマ送りのパーフォーレーションまで切落し、通信筒に入れ鳩を飛ばした。鳩の飛び距離は通常300kmくらいですが、その時、船は東京から600kmも離れた洋上でした。4羽の内1羽だけが、運良く貨物船に保護され下田港に入った連絡が毎日新聞に届き、無事回収されて掲載されました。ただ、皇太子の写真よりもむしろ、「皇太子さまほめて・・・私は力の限り飛んだ」という見出しと共に、鳩の頑張りぶりが大きな話題となりました。

飛行機が使われ始めた頃は、2本のポールに張ったロープにフィルムを入れた籠を吊るし、フックで吊り上げ回収して空輸する方法が行われました。

その競争の極めつけは、1932（昭和7）年のロサンゼルス五輪です。海外との写真電送が実用化される前で、船で日本まで15日はかかるが何とか開会式前に掲載したいと、開会式の写真を客船で運び、房総沖でチャーターした漁船に落し、飛行機で吊り上げ東京に運び掲載する作戦が行われました。そうした競争もだんだんエスカレートし、事故も起こるようになり、間もなく中止になったのですが、いかにして速く送り掲載するかの競争と技術革新は続きます。

電送機が初めて使われたのは、1928（昭和3）年の昭和天皇即位御大典でした。送受信機と中継増幅設備などを含めると6.5トンのセットになったという。明治から昭和にかけての、写真の送稿やカメラ・電送機などの工夫、発達のきっかけは、皇室行事だったと言います。

（つづく）



代官山撮影会開催

2011年10月25日、東京の代官山にて、支部撮影会を開催した。

10時に東横線代官山駅集合し、参加者12名で代官山周辺をブラブラしながら思い思いに撮影を開始。

スタートすると「鷹を飼っている所へ行こう」と言うことになり2羽の鷹に興味深く撮影。(国際色豊かなモダンタウンとして知られる代官山に、鷹匠がいるとは...驚き。)写真上

その後珍しい用品店を見つけては店内を撮影。代官山特有?のショールームを覗いては入念な撮影。この分では昼食の場所への到達は相当遅れるなど判断した。

皆さんの“お気に召すままに”誘導し、最後にメキシコ料理を食べて解散した。

後日、蔦屋書店がオープンして、代官山のイメージを更によくしたので、写真を愛する人にとっては、被写体が増えました。イベントも多くなりましたので、代官山へ是非遊びに来て下さい。

(撮影会担当 本村政治)

(編集後記)

何とか年度内にダブルイシューという形で、発行にこぎ着けました。大幅に発行が遅れたこと、心からお詫び申し上げます。私事で恐縮ですが、母の在宅介護と、最近の震災報道や想定の見直しで、登録耐震診断士はここ数ヶ月忙殺されていきました。

次号については、できるだけ早めに着手します。皆様のご協力よろしくお願いたします。(川村)

ファッショナブルタウン代官山 (本村政治)

